

第23回 明治村賞 高階秀爾氏に贈呈

明治村では、明治時代を主題とする学術や芸術に功績のあった方を毎年一名選考し、明治村賞をお贈りしていますが、本年の受賞者は、西洋美術と我が国の近代美術史研究の第一人者である高階秀爾氏（国立西洋美術館館長）に決定、六月十八日、東京會館で贈呈式を行いました。

高階秀爾氏は、東京大学教養学部を卒業後、五年間にわたりパリに留学して西洋美術史を学び、昭和三十四年に帰国して国立西洋美術館に勤務されました。以後、西洋美術作品を我が国に紹介して西洋美術史の普及・啓蒙に尽力され、昭和四十六年から東京大学文学部美術史学科で教鞭を執り、後進の育成にも力を注がれました。平成四年に退官、国立西洋美術館の館長として現在御活躍中です。

主たる研究分野は、ルネッサンスから二十世紀までの西洋美術史です。

が、留学中の研究から特に近代の分野に興味をもち、西洋との対比という視点から日本近代美術を見直すという論点に立って、近世までの研究に偏りがちであったそれまでの日本美術史研究に新風を吹き込みました。

また、西洋美術関係の著作のほか『日本近代の美意識』『日本絵画の近代』などを始め日本の近代美術に關しても多くの著書があり、この研究分野にさまざまな角度から新たな方法を提起されています。

また、美術史学会ほか多くの学会、学術団体でも活躍され、明治美術学会創立への尽力、同学会主催による国際シンポジウムの開催など、日本近代美術史研究の活性化及び国際化に大きく寄与されました。

文学者の眼

明治の文豪夏目漱石はその代表作『虞美人草』（明治四十年）の中でイルミネーションを次のように述べている。

「閃く影に躍る善男子、善女子は家を空しうして、イルミネーションに集まる。」

「文明を刺激の袋の底に飾り寄せると博覧会になる。博覧会を鈍き夜の砂に灑せば燦たるイルミネーションになる。苟しくも生きてあらば、生きたる証拠を求めんが為にイルミネーションを見てあつと驚かざるべからず。」

登場人物が何人か語らって博覧会の夜景を見物した折の描写である。きわめて通俗的な形容ながらイルミネーションで飾られた建物がまるで竜宮城

イルミネーション

文明開化のあかり

だとも言われているが、まさしく文明開化の象徴ともいべき光景が繰り広げられている。また硯友社同人の文学者小栗風葉も、明治の若者群像を描いた作品『青春』（明治三十八年〜三十九年）の中で次のように書いている。

「車道の両側には一間置に色電気を点けて、遠くを見ると、丁度南京玉の紐を張渡したやうな中を、五色のイルミネーションに包まれた花電車が、何れも何れも満員の札を掲げて誇然と通って居る。是も亦色電気で飾った各停留所の電柱の下には、其の満員の上へ更に乗込まうと群衆、…」

これは当時日露戦争祝勝記念として走らせた東京市電をいきいきと描写したものである。

いずれもまだ電灯が珍しい時代の東京風景である。

電灯の始め

明治以前の我が国ではあかりといえば植物油を利用したほの暗い行灯や提灯の類しかなく、月の出たない夜ともなると墨を流したような闇の世界になるのがふつうであった。明治になってランプ・ガス灯が出現したことにより、たちまち明るい夜が誕生したわけで人々の驚きは想像するにかなくない。

電気はいうまでもなくエヂソンの発明であるが、我が国で初めて電灯がともされたのは明治十一年三月、電信中央局の開業祝賀会席上であった。当時工部大学の電信学科教授であるお雇い外国人W・エアトンが講義用のアーク灯を点灯して大勢の来賓を驚かせたという。ついで一般の人々に宣伝するため明治十五年十一月、銀座の大倉組前にアーク灯の街灯がともされた。この情景は錦絵などに描かれ、まるで昼間のように明るいこの不思議なあかりを見ようと大勢の見物人が集まり大評判となった。（図1）翌年には東京電燈会社が設立され、急速に電気の普及が計られた。大正時代になると東京市内にはおおむね電灯がゆきわたった。電気は日常生活の必需品になるとともに、商業用の広告宣伝のためにも積極的に用いられ、店舗あるいは盛り場・催し物のイルミネーションとして使われるようになり、都市の景観は一層華やかなものになりつつあった。



4 第5回内国勸業博覧会夜景

家庭にも普及しはじめたが、装飾としてのイルミネーションの始まりは明治三十六年、大阪で開催された第五回内国勸業博覧会の会場であった。(図4)この、明治を代表するといわれた大博覧会は、三月から七月まで大阪の天王寺公園を中心会場として空前の規模で開催され、出品点数・入場人員ともそれまでの博覧会とは桁違いに多く、外国からの参加が十三ヶ国にもほり盛況を極めた。科学技術の先端をゆく自動車・冷蔵庫・エレベーターなどの珍しい出品物がまず人目を惹き、さらに電気が多く使用されたことに大きな特徴があった。

夜間公開は建物の外観のみであったが、日曜祭日に行われ、日没前から群衆が詰めかけた。正面入口アーチの電灯でまず第五回内国勸業博覧会の文字がくっきり浮かび上がり、本館すべてに施されたイルミネーションが暗夜に不夜城のように出現した。電光を使った大噴水塔、美術館前のサーチライト等あらゆる箇所に電飾が付けられ、当時としては大変画期的な会場設計で多くの見物人を集めた。

続いて明治四十年に開催された東京勸業博覧会でもまたイルミネーションが売り物となり、前述の『虞美人草』に描かれた情景が人々の人気を呼んだ。この博覧会は東京上野公園を主会場として三月から七月まで開かれ、夜間開場は隔日もしくは日曜日と定められ、ここでも全館イルミネーションが灯された。わけても美術館前に設けられた六段の石造りの噴水塔は、滝のように水流が落下す

5 東京勸業博覧会噴水夜景



2 エッフェル塔の夜景 (パリ博・1900年)

イルミネーションとは電飾・照明と訳されており、多数の電気をともして飾ることを指す。イルミネーションが始めて灯されたのは、一八八九年(明治二十二年)にパリで開催された万国博覧会の会場で、最新の技術を駆使して電気が照明と動力に使われた。この時建てられたエッフェル塔を中心に飾られた一万灯余りの白熱灯とアーク灯によるイルミネーションが、非常な人気を博した。次いで一九〇〇年のパリ万博でも電気を大量に用い、より大仕掛けで華やかな夜間照明が会場を彩った。(図2・3)

この博覧会を見物した文学者大橋乙羽は、その紀行文『欧山米水』(明治三十三年)に、「光彩爛として不夜城をなせる様殆んど人為の業とも思はれず」と驚嘆し、樹木に灯されたイルミネーションをまるで熟した蜜柑がたわわに生っているようだと日本的な形容でその美しさを表現している。

十九世紀末におこった産業革命による近代技術の波はまずこうした博覧会に大きな影響を与え、次々と考案される機械技術を広く一般に紹介する場ともなった。

パリの灯

明治のイルミネーション

こうした西欧の潮流を受け、我が国でも電気という今までにない文明の利器が一般に知れ渡り、

3 電気宮と噴水夜景 (パリ博・1900年)



宇治山田郵便局、移築工事報告書頒布のお知らせ



宇治山田郵便局 旧状外観
大正4年11月21日

昭和44年、明治村に移築された宇治山田郵便局は、明治42年5月伊勢神宮外宮前に山田郵便局として建てられ、昭和30年市名改制により伊勢郵便局と改称されました。そして、昭和43年解体されるまで、長年にわたり伊勢市民・神宮参拝者に親しまれ、多くの人々に利用されました。

外観がハーフトインバー様式のこの建物は、通信省の通信技手白石圓治の設計となり、中央に円形ドームの公衆室を配したL字型平面で細部の手法にも入念な注意が払われております。

神都の地として重要な情報拠点に位置する山田郵便局は、昭和6年一等郵便局に昇格となりました。明治に建てられた現存する郵便局局舎で、一等郵便局となったものは、この建物を含めて三件だけです。そのうち木造の局舎はこの建物だけで、ほかは煉瓦造であり、歴史的に意義のあるきわめて貴重な郵政建築であり、近代化遺産といえます。

この度、東海郵政局の協力を得て『明治村建造物移築工事報告書第十集 宇治山田郵便局(旧伊勢郵便局)』を発行します。ご希望の方は、ご住所・お名前を明記の上、頒価・送料共同封の上、現金書留にて東京事務所にお申し込み下さい。

頒価5000円(送料380円) 限定200冊

企画展

涼をもとめて 明治の夏のくらしと行楽

「夏は夜」と平安の昔に書かれていたように、夏は夜の風情を楽しむ季節です。

日中の暑さを避けて屋内で過ごした人々が宵の頃、涼を求めて屋外に繰り出します。夏祭りや蛸狩り、花火見物、夕涼み、その宵を彩るさまざまなものは今も昔も変わらない夏の楽しみ方を伝えてくれます。

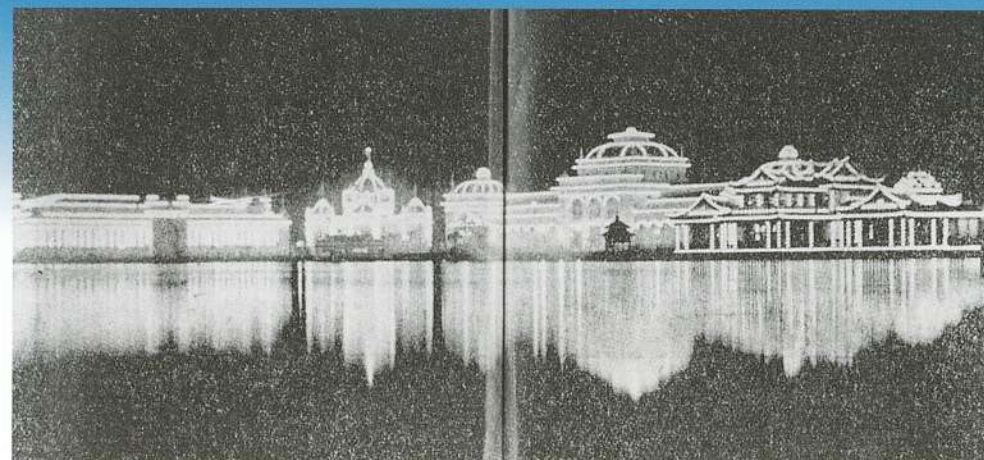
また、明治時代には交通の発達に伴い海水浴や避暑など夏の行楽が多様化してきました。そうした行楽のために今日のガイドブックに匹敵する「名所案内」「避暑地案内」なども数多く出版されました。

今回の「涼をもとめて 夏のくらしと行楽」では、錦絵・ポスター類約20点、生活資料約60点で構成し、その他、灯火玩具や、七夕、八朔、夏のまつりに関する玩具なども展示します。

明治村は夏一色。明治の人々の涼を求めたくらしをご覧ください。

会期=6月29日(日)~8月31日(日) 会場=三重県庁舎1階特別展示室

千代田之大奥 入浴(部分)
周延画 明治28年



6 東京勲業博覧会夜景

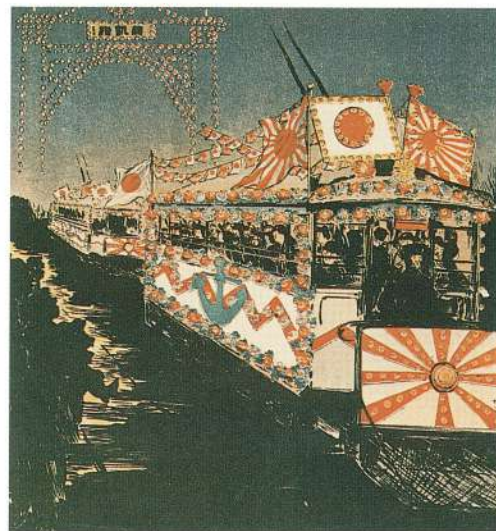
る仕組みで、周囲に取り付けられた電灯が三色に変化する美観は人々を驚かせるのに充分であった。不忍池周辺の会場では水面に光が写り、二重のイルミネーションとなってより効果的に光の城が浮かび上がった。前回の大阪の博覧会で使われたイルミネーションの約五倍の規模であったという。(図5・6)この博覧会を祝って東京市中でも主な目抜き通りの両側には電灯を吊るし、百貨店も其の外観をイルミネーションで飾った。

以後このイルミネーションは大流行し、後に開催された各種の博覧会・共進会にはつきものとなった。また博覧会ばかりでなく日本各地の大規模店舗や歓楽街の効果的な夜間装飾として大いに取り入れられるようになった。

一方、小栗風葉の小説に見られる花電車は、明治三十八年日露戦争祝勝記念として運転された路面電車で、一台に三百個の電球を飾り、桜の造花で車体を覆い尽くした。昼間は花飾りだけであるが、夜には電球が灯され煌々と輝く光の帯のような情景が街を貫いた。(図7)博覧会が開催された時も記念運行され、博覧会場でイルミネーションが点灯される日には決まって走る取り決めとされた。

現代の都市の夜は、明治時代と比べると光の洪水であり、まさに隔世の感がある。夜間照明としては、イルミネーションの他に電灯による部分的なライトアップや、ガスを用いたネオンサインによるものなど多種多様となっている。

イルミネーションの照明方法は、建物そのもの



7 日露戦争凱旋記念 花電車

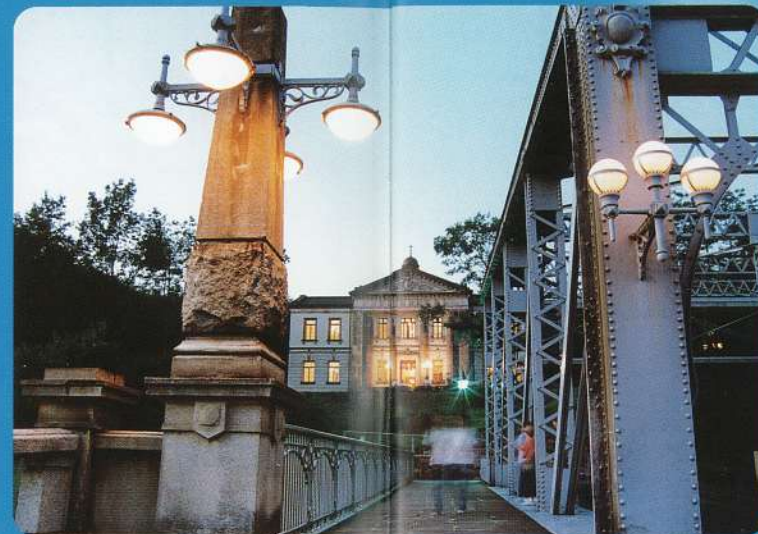
でなくその輪郭を浮かび上がらせることに重点が置かれているため、その周囲にある程度の広さと暗さがあると有効である。従って現在の明るく密集した町中ではとりたてて人目を惹くほどではない。どこもかしこも明るいというわけではない明治という時代、ことに博覧会建築などには最もふさわしい照明であったといえよう。

しかし、電気の便利さを至極当然のこととして捉えている私達に引き比べ、当時の人びとはいかに素朴に電気の明るさにあこがれ、驚嘆していたであろうか。イルミネーションの瞬きに明治の人びとの笑顔が彷彿としてくるように思われる。

夏の明治村

明治の夏景色

7月19日(土)～8月31日(日)



宵の明治村

8月9日(土)～17日(日)

今回10周年を記念し、浴衣の女性は終日入場無料、浴衣の男性も割引します。期間中毎日21時まで開館し、おなじみの建物のライトアップ・イルミネーション、ガーデンコンサート、浴衣着こなしコンテスト、盆踊り、西洋屋台などに加え、夕暮れ消防訓練、きもだめしなど盛りだくさんのイベントを用意しています。

写真コンテスト入賞作品展

8月1日(金)～11月30日(日)

写生大会入賞作品展

7月12日(土)～8月31日(日)

明治村日曜講座「明治建築種あかし」

7月27日(日)、8月10日(日)、24日(日)

7月のテーマ「窓」

8月のテーマ「明治建築で過す夏」

明治の電話で話そう (毎日)

札幌電話交換局

明治の衣裳で歩こう (毎日) 30分700円～

皇宮警察署別館

樹木染め教室 500円～

毎土曜

機織り実演

毎日曜

クイズラリー・スタンプラリー



京都中井酒造

再現 夏の風情

森鷗外・夏目漱石住宅、清水医院、東松家住宅、京都中井酒造などの日本建築でそれぞれの建物にあった夏の生活風景を再現します。



東松家住宅

明治村めいず(迷路)

千早赤阪小学校講堂横広場
広場に迷路が登場します。

路地裏で水遊び

清水医院横路地裏
おなじみの竹馬、たがまわしにシャボン玉や水鉄砲などの水遊びが加わりました。

明治の自転車に乗ろう 200円

第四高等学校武道場「無声堂」横広場
レトロな自転車の乗車体験が人気です。

納涼広場(日本風の昔屋台)

第四高等学校武道場「無声堂」前
明治の復刻屋台のほか、夏らしく大きな水柱が登場します。

日傘レンタルサービス 300円

明治の水撒き